新見公立短期大学紀要　第30巻
一八一～一九五頁、二〇〇九年

論稿

鹿児島県硫黄島の遣唐使漂着伝説と灯台鬼説話

原田信之
（日本文学）

鹿児島県硫黄島には遣唐使漂着伝説が伝えられている。島の伝承によると、かつて遣唐使の息子が父親の遣唐使「軽（野）大臣」を中国から連れ戻したが、難破して漂着した硫黄島で軽大臣が亡くなったので、島に葬ったという。硫黄島にある徳躰神社（とくたいじんじゃ）は遣唐使の軽大臣を祀っているとされ、島では徳躰神社のことを「カルノト」「カルノトド」「カルノオトート」「カルノオトド」などと呼んでいる。遣唐使の軽大臣が中国で灯台鬼にされたという有名な説話は平康頼『宝物集』が初出とされるが、平康頼がどこで軽大臣の灯台鬼説話を知ったのかはよくわかっていない。硫黄島は鹿ヶ谷の変で平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島であるとされる。平康頼が硫黄島に流された時に遣唐使軽大臣を祀る塚と灯台鬼説話を知った可能性さえあり、極めて興味深い。硫黄島に伝承されている遣唐使「軽大臣」にまつわる伝説は、灯台鬼説話をめぐる問題等を考えるうえでも重要なてがかりを与えてくれるものと考えられる。

（キーワード）硫黄島、平康頼、徳躰神社、軽大臣、灯台鬼

はじめに

鹿児島県大隅諸島の硫黄島（鹿児島県鹿児島郡三島村硫黄島）は薩摩半島南方約五十キロにある面積約十二平方キロ、周囲約十九キロの島で、薩摩硫黄島とも呼ばれている（太平洋戦争の激戦地として有名な東京都小笠原村の硫黄島と混同されることがあるが全く関係がない）。一九七〇年代のリゾートブームの時期にセスナが運航されたこともあったが、現在は鹿児島港から週二便の三島村営「フェリーみしま」による定期航路が唯一の交通手段となっている。薩摩硫黄島は鹿ヶ谷の変で平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島であるとされる。

遣唐使の渡航ルート上にあるためか、鹿児島県大隅諸島の島々には遣唐使漂着伝説が伝承されている。硫黄島の伝承では、島にある徳躰神社（とくたいじんじゃ）は遣唐使の軽（野）大臣を祀っているとされる。

遣唐使の軽大臣が中国で「灯台鬼」にされたという有名な説話は平康頼『宝

物集』が初出とされるが、平康頼がどこで軽大臣の灯台鬼説話を知ったのかはよくわかっていない。本稿は、硫黄島に伝承されている遣唐使漂着伝説を紹介するとともに、灯台鬼説話をめぐる問題等について考察することを目的とする。[1]

Ⅰ　康頼・俊寛と鬼界島

最初に、一一七七年（安元三・治承元）の鹿ヶ谷の変により平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島はどこかという問題についてみておくことにしたい。俊寛らが配流された鬼界島がどの島であったかについては、鹿児島県三島村の硫黄島のほかに、鹿児島県大島郡の喜界島、長崎県長崎市の伊王島など複数の説がある。また、俊寛終焉伝説のある地は、わかっているものだけで十数カ所あるという。[2]

異説が生じる原因の一つとして関連史料が少ない点があるわけであるが、鹿児島県三島村の硫黄島が鬼界島であるという説の根拠の一つとして知られているものに延慶本『平家物語』の記述がある。延慶本『平家物語』第一末に平康頼・俊寛らが配流された際の状況を記した部分があるので、次に引用してみることにする。

漸日数経ニケレバ、薩摩国ニモ着ニケリ。是ヨリ彼ノ鬼海嶋ヘハ日ナミヲ待テ渡ラムトス。／鬼界嶋ハ異名也。惣名ヲバ流黄嶋トゾ申ケル。端五嶋、奥七嶋トテ、嶋ノ数十二アムナル内、端五嶋ハ昔ヨリ日本ニ随フ嶋ナリ。奥七嶋ト申ハ、未ダ此土ノ人ノ渡タル事ナシ。端五嶋ノ中ニ流黄ノ出ル嶋々ヲバ、油黄ノ嶋ト名付タリ。サテ順風有ケレバ彼嶋ヘ押付テ、端五嶋ガ内、少将ヲバ三ノ迫ノ北ノ油黄嶋、康頼ヲバアコシキノ嶋、俊寛ヲバ白石ノ嶋ニゾ捨置ケル。彼嶋ニハ白路多シテ石白シ。水ノ流ニ至マデ、浪白シテ潔シ。カヽリケレバニヤ、白石ノ嶋ト名付タリ。責テ一嶋ニ捨置タラバ、ナグサム方モ有ベキニ、ハルカナル離レ嶋共ニ捨置ケレバ、悲ナムドハ愚也。サレドモ、後ニハ俊寛モ康頼モトカクシテ、少将ノ有ケル油黄嶋ヘタドリ付テ、互ニ血ノ涙ヲ流ケリ。彼嶋ハ嶋ノマハリ西国廿里ノ嶋也。其地乾地ニシテ、田畠モナケレバ米穀モナシ。自ラ渚ニ打ヨセラレタル荒和布ナムドヲ取テ、僅ニ命ヲ続計也。嶋ノ中ニ高キ山アリ。嶺ニハ火モヘ麓ニハ雨降テ、雷鳴事隙ナケレバ、神ヲケスヨリ外ノ事ナシ。冥途ニツヾキタムナレバ、日月星宿ノ下ナリト云ドモ、寒―暑理ニモ過タリ。薩摩潟ヨリ遙々ト海ヲ渡テ行ク道ナレバ、オボロケニテハ人ノ通事モナシ。[3]（傍線原田）

延慶本『平家物語』のこの部分に記されている内容の要点をまとめると、次のようになる――平康頼・俊寛・藤原成経らは薩摩国から遙々海を渡って流されたこと、鬼界（海）島は異名で惣名は「流黄嶋」であること、俊寛らが流されたところは周辺に端五島と奥七島の十二の島があること、端五島は昔から日本に従うが奥七島は従っていないこと、端五島の中で硫黄の出る島々が「油黄ノ嶋」と名付けられていること、端五島のうち少将を「三ノ迫ノ北ノ油黄嶋」・康頼を「アコシキノ嶋」・俊寛を「白石ノ嶋」に捨て置いたが後に俊寛と康頼が少将のいる「油黄嶋」に渡ったこと、「油黄嶋」は「嶋ノマハリ西国廿里」で高い火山があり火が燃えていること、などである。延慶本『平家物語』のこの部分では、平康頼・俊寛・藤原成経らが流された島の名称として「鬼海嶋」「鬼界嶋」「流黄嶋」「油黄嶋」の四つの表記がみえる。

延慶本『平家物語』のこの部分の記述から、先に紹介した長崎県長崎市の伊王島、鹿児島県三島村の硫黄島、鹿児島県大島郡の喜界島という三つの説の適不適を検討してみることにする。

まず、島がどこに所属していたかという点から検討してみる。平康頼・俊寛・藤原成経らが流された島は「薩摩国」にあったようである（延慶本『平家物語』第二本にも「薩摩国油黄嶋」とあり、平康頼『宝物集（第二種七巻本系）』巻之上の冒頭部分にも「薩摩国の島を出て」「鬼界が島の有様は」とある）。したがって、肥前国にある伊王島（長崎県長崎市）は明らかに不適格といえよう。次の鹿児島県大島郡の喜界島も、俊寛らが流された島が「薩摩国」にあったとす

ると不適格といえる。『中山世鑑』（一六五〇年成立）や『中山世譜』（一七二五年成立）等の琉球の正史によれば、奄美諸島は、一二六六年（南宋・咸淳二年、元・至元三年、日本・文永三年）に琉球王英祖に入貢してから一六〇九年（慶長十四年）の薩摩藩島津氏の琉球侵入まで琉球王国の統治下にあったとされる。つまり、奄美諸島が「薩摩国」に支配されるようになったのは、慶長十四年（一六〇九）の島津氏の琉球侵入以降のことであり、平康頼・俊寛・藤原成経らが流された安元三年（一一七七）頃の奄美諸島は、琉球王国統治時代よりさらに前の、実質的にはどこにも属していない「無所属時代」[4]であったとされている。俊寛らが流された島が属する「端五嶋」について、延慶本『平家物語』に「端五嶋ハ昔ヨリ日本ニ随フ嶋ナリ」と記されていることからも、奄美諸島大島郡の喜界島説は成立しにくいことがわかる。つまり、三説のうち、俊寛らの時代に「薩摩国」に所属していた島は鹿児島県三島村の硫黄島のみということになる。

次に、火山がある島という点から三説を検討してみると、長崎県長崎市の伊王島にも鹿児島県大島郡の喜界島にも火山はないので不適格で、火山がある三島村の硫黄島のみ合致しているということになる。三島村の硫黄島には硫黄岳（海抜約七〇三メートル）があり、現在でも常に噴煙が昇り、硫黄のにおいが島内のあちこちに漂っている。硫黄島は、天保十四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』巻之二十八「硫黄島」の項に「此島古来硫黄を産す、太宰府別貢とあるは、即此島の所出なり、因て島の名とす」[5]とあるように、古くから硫黄を産した島として知られており、島名の由来も硫黄を産したことからつけられたということである。硫黄島の硫黄採鉱の起源は不詳であるが、少なくとも中世、近世、近代と採鉱され続け、最盛期には月産七千トンを産出したほどであったが、[6]硫黄価格の不採算により現在では閉山されている。

先に引用した延慶本『平家物語』の傍線部分をみると、周辺に「端五嶋」と「奥七嶋」の「十二」の島があり、端五島は昔から日本に従うが奥七島は従っていないことが記してある。ここの「十二」の島は中世に薩摩国で「十二島」（じゅうにとう）と呼称された島嶼群名を指していると推定される。「十二島」は「鬼界（貴海）十二島」ともよばれたといい、硫黄島・竹島・黒島・口永良部島・屋久島の口五島（くちごとう）と、口之島・臥蛇島・平島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島の奥七島（おくしちとう）からなり、「その起源は薩南平氏が活躍した平安時代後期にさかのぼる」[7]とされる。延慶本『平家物語』の「端五嶋」は硫黄島・竹島・黒島・口永良部島・屋久島の口五島（くちごとう）で、「奥七嶋」は口之島・臥蛇島・平島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島の奥七島（おくしちとう）とみてよいであろう。これらのことから、平康頼・俊寛・藤原成経らが流されたのは鹿児島県三島村の硫黄島と考えられ、それ以外の長崎市伊王島説や大島郡喜界島説は成立しえないことがわかる。これまでの研究においても、鹿児島県三島村の硫黄島説が最も有力で、ほぼ定説となっているとみてよいようである。[8]

本節では、平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島が鹿児島県三島村の硫黄島である可能性が極めて高いことを確認した。特に延慶本『平家物語』第一末に、薩摩国にある「流黄嶋」（異名「鬼界嶋」）の周辺に「端五嶋」と「奥七嶋」の「十二」の島があるなど、周辺の地理情報が比較的正確に記述されていることから、康頼・俊寛らが流された鬼界島は三島村の硫黄島と断定してもよいように思われる。

Ⅱ　康頼『宝物集』の灯台鬼説話

延慶本『平家物語』によれば、硫黄島に配流された三名のうち、平康頼と藤原成経は許されて治承二年（一一七八）に硫黄島を出て、治承三年（一一七九）に都へ戻ってきたとされるが、許されずただ一人残された俊寛は硫黄島で亡くなったという。

硫黄島から都へ戻ってきた平康頼は、京都の東山にこもって『宝物集』を執筆したと推定されている。平康頼『宝物集（第二種七巻本系）』巻之上の冒頭部

分に薩摩国の鬼界が島（硫黄島）に流された自分自身のことについて記した部分があるので、引用してみることにする。

治承元年の秋、薩摩国の島を出て、おなじき二年の春、二たび旧里にかへりて侍りしかども、世の中の有しにもあらず、浮木に乗けん人の心地せしかば、世の憂時の住家なれば、心をもなぐさめむとて、東山なる所に籠居て侍る程に、昔、花のもと月の前にて見馴たりし人、蘆がきのまぢかく来りたるよし、申つかはしたれば、竹の編戸ををし開きつゝ、いれ侍ぬ。／「心づくしの思ひに年経にけれども、うさに堪へたりける身なりければ、生の松原、いきて帰りきたる悦になん来る」とぞ申める。／「三ヶ年の夢、わづかに覚たりといへども、一生涯の歎、いまだ晴ざる程なれば、人にもしられで侍るに、いかにして尋ては来り給へるぞ。鬼界が島の有様は、申ても無益と侍べし。故郷の事、風の伝にも聞難く侍りき。都を出て後、如何なる事か侍りし」と申せば、／「何となく世の中も静ならずみゆる。げにや、嵯峨の釈迦こそ、天竺へ帰り給はんずるとて、一京の人、道も去あへずまいり侍めれ」と申せば、吾朝日本国の不思儀には、此仏おはしますを志たんめるに、まことならば心うく悲しくぞ侍るべき。[9]（傍線原田）

ここに引用した『宝物集』巻之上の傍線部分において、平康頼は治承元年の秋に許されて薩摩国の鬼界が島（硫黄島）を出て、治承二年の春に都に帰ってきたことを述べているが、これまでの研究では、この治承元年は治承二年（一一七八）の誤りで、治承二年は治承三年（一一七九）の誤りだと考えられている。[10] 次の波線部分では自分が京都の「東山」に籠居していることが述べられており、その次の二重傍線部分では、足かけ三年間「鬼界が島」に流された時の悪夢のような経験は一生涯嘆きが晴れない程ひどいものであったということが記されている。平康頼は、『宝物集（第二種七巻本系）』巻之上の冒頭部分のほかに、巻第三に「鬼界が島に侍りけるころ、いまだ生きたるよしを、母のもとへ申つかはしける／沙弥性照／さつまがた奥の小島に我ありとおやにはつげよ八重の塩風」[11]、巻第七に「検非違使左衛門尉平康頼、罪もなくて鬼界が島へながされ、出家の後、かくぞよみ侍りける／つゐにかくそむきはてける世中をとくすてざりし事ぞくやしき」[12]などと、繰り返し「鬼界が島」に配流されたことについて記している。これらの記述から、平康頼にとって、鬼界が島（硫黄島）での経験が生涯決して忘れることのできない過酷なものであったことがうかがえる。

延慶本『平家物語』第二本の「十六　少将判官入道入洛事」に、許されて都に戻った丹波少将（藤原成経）と判官入道（平康頼・法名は性照）とのやりとりを記した部分があるので、次に引用しておく。

サテモ漕出ニシ油黄嶋ノ、堪ガタク悲シカリケル事、僧都残捨ラレテ歎悲ムラム有様、我等ガアラマシノ熊野詣ノシルシニヤ、再ビ都ヘ帰上リヌル事ノアリガタサナムド、互ニ宣ヒ通シテ、各ノ袖ヲゾ絞ラレケル。判官入道申ケルハ、「昔シ召仕シ下人、東山双林寺ト申ス処ニ候キ。未ダナガラヘテ候ハヾ、其ニ草庵結テ、今ハ一向後生菩提ノイトナミヨリ外ハ、他事候マジ。若シ真如堂、雲居寺ナムドヘ御参詣ノ次ニハ、必ズ御尋候ヘ。性照モ世シヅマリ候ナバ、常ニハ六波羅殿ヘモ参リ候ベシ。此ノ三年之間ウカリシ嶋ノ中ニテ、朝夕一所ニテナレマヒラセテ候シ御遺コソ、イカナラム世マデモ、ワスレマヒラセ候ベシトモ覚ヘ候ハネ」ナムド申テ、七条東ノ朱雀ヨリ下テ、東山ヘトテゾ行ニケル。[13]（傍線原田）

この部分は、丹波少将（藤原成経）と判官入道（平康頼・法名性照）が、硫黄島に流されたことが耐え難く悲しいことであったこと、俊寛のみが島に残されて嘆き悲しむ様子、再度都に帰ることができた事の有り難さなどを語り合ってそれぞれ涙を流したことを述べ、判官入道（平康頼）が知人が昔住んでいた東山双林寺に草庵を結んで仏事に専念する意向を持っていることなどを語る内容となっている。先に引用した『宝物集』巻之上の波線部分に「東山なる所に籠居て侍る程に」とあったわけであるが、延慶本『平家物語』第二本の傍線部分から、判官入道（平康頼・法名性照）が草庵を結んでいた場所は東山の「双林寺」であったらしいことがわかる。また、波線部に「性照」とあるように、

平康頼が自分自身のことを「性照」という法名で名乗ったように描かれている。なお、『源平盛衰記』巻第十には、判官入道（平康頼）は「双林寺ノ庵室ニ閉籠、ナカラン跡ノ形見トテ、涙ノ隙々ニ宝物集ヲ造テ、世ニコソ披露シタリケレ」[14]と、平康頼が双林寺の庵室にこもって『宝物集』をつくったと述べられている。

これらのことから、許されて硫黄島から戻った平康頼は、生涯決して忘れることのできない硫黄島での過酷な経験を胸に秘めながら、「東山双林寺」の庵室にこもって『宝物集』を編纂したらしいことがうかがえる。

この『宝物集』巻第一に、「灯台鬼」の話としてよく知られた説話が所収されている。「灯台鬼」の説話は『平家物語』など諸書に引用されており、これまでに多くの研究の蓄積がある。[15]次に平康頼『宝物集（第二種七巻本系）』巻第一の灯台鬼説話を引用する。

〈事例1〉『宝物集』巻第一の灯台鬼説話

軽の大臣と申ける人、遣唐使にて渡りて侍りけるを、如何成事か有けん。物いはぬ薬をくはせて、身には絵を書、頭には灯台と云物をうちて、火をともして、灯台鬼と云名を付て有と云事を聞て、其子弼の宰相と云人、万里の波を分て、他州震旦国まで尋行て見たまひければ、鬼泪をながして、手の指をくひ切て血を出してかくぞ書給ひける。

我是日本花京客　汝即同姓一宅人
為父為子前世契　隔山隔国恋情辛
経年流涙蓬蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他州成灯鬼　争帰旧里寄斯身

是を見給ひけん子の御心、いかばかり覚え給ひけん。さて、唐の御門にこひとりて、日本国へぐして帰り給へりとぞ申ためり。子ならざらむ人、他州震旦まで行人侍りなんや。

此事日本紀以下諸家の日記にみえず。さ程の人、名をしるさず。無不審にあらず。遣唐使の唐にとゞまるは、清河の宰相・安倍の仲麻呂等也。但大和国に軽寺と云所あり。彼大臣帰朝の後建立といへり。能々定説〔を〕可尋也。[16]（傍線原田）

〈事例1〉は、軽の大臣という遣唐使が唐で灯台鬼にされたという話である。軽の大臣という人が遣唐使として唐に渡ったが、どういうことがあったのか、話すことができない薬を食べさせられ、身に絵を書かれ、頭に灯台をのせて火をともし灯台鬼と名付けられた。この事を聞いた軽の大臣の子で弼の宰相という人が、唐まで尋ねて行って見たところ、灯台鬼が涙を流して手の指を食い切って血を出し、その血で自分はお前の父親で灯台鬼とされたという内容の漢詩を書いた。これを読んだ子が唐の王から灯台鬼をもらい受けて日本国へ連れ帰ったという。

この『宝物集』巻第一の灯台鬼説話は、孟宗・伯瑜・丁蘭・郭巨・白年・王祥などの中国で著名な「孝養」説話を引用後、「こまかには孝子伝・蒙求などに申して侍るめり。我朝にもか様の事おほく侍るめり」と述べた後に記されている。つまり、この灯台鬼説話は日本の「孝養」説話として紹介されていることがわかる。注目されるのは平康頼自身が注記したと推定される傍線部で、遣唐使になったような人なら名が記されているはずなのに『日本書紀』以下諸家の日記に名がみえないことは不審であること、遣唐使で唐に留まったのは清河の宰相（藤原清河）や安倍（阿部）仲麻呂などであること、ただし大和国に軽寺という所があり軽大臣帰朝の後に建立したというが、よくよく定説をさぐり求める必要があるなどと記している。

『宝物集』の灯台鬼説話の出所について、高橋俊夫氏は「説話そのものの出所・生成過程はなお不明としても、説話形成の核ともなりうるような歴史的事実（玄理即軽大臣ではないにしても）は、おぼろげながらも存したものの如くである。後掲の長門本本文に、推古・皇極という天皇名が所見するが、あながち無稽の附会でもなさそうである」[17]と述べている。また、山田昭全氏は「軽の大臣が灯台鬼にされ、息男弼宰相が救出に出かけた話は宝物集が初見である」とし、そのことは「此事日本紀以下諸家の日記にみえず。さ程の人、名をしる

さず。無不審にあらず」という康頼自身の注記から明らかであると述べている。[18] つまり、現在の所、軽の大臣の灯台鬼説話の出所は不明で、『宝物集』が「初見」ということのようである。

また、小川賢真氏は「灯台鬼説話は宝物集に於ては七巻本巻一世俗の宝論の子宝論として我国の例に置かれている孝養談であるが、この説話の宝物集に於けるのみならず中世文学に重要な意義を有することは、／一、仏教説話でないこと／二、我国で作られたこと／三、当時における説話として重要な意義を有すること／等である」[19]と述べている。この小川氏の論で特に注目されるのは、中国に灯台鬼説話の典拠を求めて検討した結果、「我国で作られたこと」が明らかになったという点である。

河原木有二氏は『宝物集』の灯台鬼説話末尾の平康頼自身が注記したと推定される部分（〈事例1〉の傍線部分）について、「単なる例証話の蒐集にとどまらず、康頼が独自に採集した説話を例証話として掲載することも一つの目的としていた、とは言えないだろうか。編集段階での、オリジナリティを求めての試行錯誤の結果が、このような説話の後に付された「注釈」となって現れたのではないだろうか」と述べている。[20] 河原木氏の論で特に注目されるのが灯台鬼説話を「康頼が独自に採集した」という部分である。

以上、『宝物集』の灯台鬼説話の先行研究を検討すると、灯台鬼説話の出所は現時点では不明であること、『宝物集』が「初見」であること、「我国で作られた」こと、「康頼が独自に採集した」らしいことなどが明らかになってきていることがわかる。

次節では、康頼・俊寛らが流された鬼界島は三島村の硫黄島であったということや、灯台鬼説話は康頼編『宝物集』が「初見」であることをふまえ、三島村の硫黄島に伝承されている遣唐使漂着伝説をめぐる問題について検討してみることにしたい。

Ⅲ　硫黄島の遣唐使漂着伝説と徳躰神社

遣唐使の渡航ルート上にあるためか、鹿児島県大隅諸島の島々には遣唐使漂着伝説が複数伝承されている。大隅諸島の島々に伝承されている遣唐使漂着伝説のうち歴史上確実なものとしては、第二回遣唐使遭難事件がある。『日本書紀』巻二十五孝徳天皇白雉四年（六五三）の条に「秋七月に、大唐に遣さるる使人高田根麻呂等、薩麻の曲、竹嶋の間に、船合りて没死りぬ。唯五人のみ有りて、胸に一板を繋けて、竹嶋に流れ遇れり。所計を知らず。五人の中に、門部金、竹を採りて筏に為りて、神嶋に泊れり。凡そ此の五人、六日六夜を経て、全ら食飯はず。是に、金を褒美めて、位を進め禄給ふ」[21]という記述がみえる。この時に遭難したのは第二回遣唐使の第二船で、第二船の大使であった大山下高田首根麻呂ら百二十人のうち、五人だけが生き残って竹島に流れ着き、竹を採って筏を作り助かったという。ここの竹島（嶋）は、鹿児島県三島村の竹島で、竹島には現在、大山下高田首根麻呂を祀る大山神社がある。[22]

平康頼・俊寛らが配流されたとみられる鹿児島県三島村の硫黄島にも遣唐使漂着伝説が伝えられている。三島村の硫黄島は、第二回遣唐使高田根麻呂が遭難したとされる三島村の竹島から十キロ程度しか離れていない。大隅諸島の島々で調査をしていると、遭難事件の後に多くの遺体が漂着したという話をよく聞くことができるので、おそらく、白雉四年（六五三）の第二回遣唐使が遭難して第二船の百二十人のうち五人だけが生き残った事件の際には、竹島や硫黄島には大量の遭難者の遺体が漂着したものと推定される。大隅諸島の島々に遣唐使漂着伝説が複数伝承されている理由の一つに、実際に何度も類似の遭難事件が発生して遭難者の遺体が漂着した事実が背景にあることがわかる。

硫黄島の伝承では、島にある徳躰神社（とくたいじんじゃ）は遣唐使の軽野大臣（かるのおとど）を祀っているとされる。硫黄島港から北方向に進むと村立三島小・中学校があり、そこからさらに東方向へ林の中の道を約五〇〇メートル進むと徳躰神社がある。現在の徳躰神社は、林の中にある小さい石の祠で、

中に自然石がおさめられている。徳躰神社の前には、三島村教育委員会が設置した説明板が立ててあり、次のように記されている（丸括弧内は原田補注）。

徳躰神社

祭神は、軽野大臣と伝えられている。／軽野大臣は、初期の遣唐使として中国に渡ったが唐の皇帝の怒りにふれて毒薬を飲まされ、言葉の言えない灯台鬼にされてしまった。／後年、その子春衡も遣（遣ヵ）唐使として中国に渡ったが、祝宴のとき、頭に燭台をのせて立っている灯台鬼が、春衡に歩み寄り、目に一杯涙をためながら、こっそり我が指を噛んで傷つけ、その血で、床に、／「燈し火の影恥かしき身なれども／子を思う　やみの悲しかりけり」と書いた。この歌を読んだ春衡は、ハッと驚き、これこそ帰らぬ父の姿よと思い、唐亭（帝ヵ）に無理にお願いをしてその灯台鬼となっている父を貰い、日本めざして帰国の途についた。／途中船は嵐にあい、硫黄島坂元に漂着した（。）村里に出て弱った父の看護をしたいと思い、ここまで連れてきたが、すい弱のあまり大臣は息絶えたのでここに葬り、その霊を徳躰神社として祭り、石祠を建てた。／三島村教育委員会

この説明板には、徳躰神社の祭神は軽野大臣と伝えられていること、遣唐使軽野大臣は中国で灯台鬼にされたこと、後に子の春衡も遣唐使となり中国で灯台鬼をみたこと、灯台鬼が指を噛んで血で床に書いた歌を読んだ春衡が父と気付いたこと、唐帝から灯台鬼を貰い帰国する途中嵐にあって硫黄島坂元に漂着したこと、父が息絶えたのでここに葬りその霊を徳躰神社として祭り石祠を建てたことなどが書かれている。この説明文と、先に引用した〈事例1〉『宝物集』巻第一の灯台鬼説話とで大きく異なるのが、息子の名前である。説明文では「春衡」とあるが、『宝物集』では「弼の宰相」とある。この名前の違いは、説明文が元にした史料が『宝物集』ではなく、別の文献であったためと推定される（この説明文は『三国名勝図会』あたりを元にして書かれたもののようである）。

現在の硫黄島では、徳躰神社についてどのように語られているのであろうか。次に、筆者が実際に硫黄島で採集した話をみてみることにする。

〈事例2〉「徳躰神社由来」

私たちはこう聞いている。中国に、まあゆや、大使ですね、大使館の大使。大使として、交渉に行かれて。したら話の途中に、中国の方との話し合いの中で、意見が合わなかったんだって。ほで、制裁を受けたらしいですね。で、制裁を受けて、まあいや、隔離されたらしい。大使が。それが何年かして、今度ぁ後から、子どもさんが、その人の子どもが、大使として選ばれ、帰って来ないもんだから、大使として選ばれて、働いたらしい。その折りに、子どもが行った大使が、話し合いか何かしようる時に、その部屋におられた方が、言葉も何もかけないけど、涙を流したって。その方が。で、不思議に考えてね、その涙。それで、落ちた涙で、足の指で、字を書かれたらしい。自分の名前。ほでその子どもは、

「あ、俺の父だ」と、ゆうことを感じたらしいです。へでその時に、口では言えないから。最後になって、

「お願いがある」と、中国の大使に。この、まあいわば奴隷ですね、「奴隷を、お受けできませんか」と、相談したらしい。

「結構だ」ということで、お父さんを、身を受けて来たんだと。その道中に帆船で帰って来る時に、難破したんだって船が。で、難破したのがこの、ここに、上げられて、打ち上げて、もうここに祀られているのが、徳躰神社（とくたいじんじゃ）だということで、天皇からこの話を聞かされました。天皇、長濱天皇から。

と、いうのは、あの徳躰神社が祀られてるのは、あの山林は、椿山は、天皇の山なんです。天皇の家の山。そこでね、それから何人となくこの徳躰神社を検視に来られた方おられます。したら、その時に、言われた方が、

「この徳躰神社は――何とかっていうでしょう。山の中に、墓地を埋めてる、よう韓国にある、丸く山を設けて。古墳。――古墳だ」とこれ。古墳だと。「この山見てください」と。「これ、山、丸くしてあるだろう」、いうことを、何人

かが来られてそういうことを言われてます。ほでそう見ると、丸く、あの山が古墳であると、いうことを、感じるようになった。私現役時代に、何人もそういう、調査に来られた方が。案内してますので。みんなの方が、そう言われてますね。豊彦さんから聞いた。そういういわれのある、意義ある、神社だと。あの、非常に興味のある、そういうことで興味のある、方が、今まで何回何人となく、今日まで調査に来られた方がおられましたね。

今こそ、あんなに、捨ててあるようにしてありますが、天皇は――姓は長濱というんですが、天皇は――、いっつも清掃を奇麗にして、灯籠から何からばっちりしておりました。はい。清掃して。あそこに、石碑が建っておるでしょう。石碑が建っておりました。奇麗にしておりましたねえ。[23]

〈事例2〉は徳躰神社の由来についての語りである。大使が中国に交渉に行った際、意見が合わなかったため制裁を受けて隔離された。何年か後、今度はその人の子どもが大使として選ばれて中国に行った。話し合いか何かをしている時にその部屋にいた人が涙を流し、落ちた涙で、足の指で自分の名前を書いたらしい。その子どもはその奴隷が自分の父であることを知り、それを貰い受けた。一緒に帆船で帰って来る時に難破して、ここに打ち上げられた。ここに祀られているのが徳躰神社で、長濱天皇（長濱豊彦さん）からこの話を聞かされた、ということである。

語りの後半は、徳躰神社の管理者などをめぐるもので、有益な情報を多く含む貴重な内容となっている。〈事例2〉の話者によると、徳躰神社が祀られている椿山は、長濱天皇家が所有しているという。これまでに徳躰神社を調査に来た人は多数おり、自分は何度も案内したが、その中の何人かが、この徳躰神社がある山は丸くなっており古墳だと指摘したということである。長濱豊彦さんから、そういういわれのある意義ある神社だとこの話を聞かされたそうで、今こそ捨ててあるようにしてあるが、長濱さんは灯籠から何からいつも奇麗に清掃をしていたという。

先に引用した〈事例1〉『宝物集』巻第一の灯台鬼説話と〈事例2〉の語りで大きく異なるのが、『宝物集』では手の指を食い切って血を出して漢詩を書いたとある部分が、落ちた涙を使って足の指で自分の名前を書いたとなっているところである。語りの場においては、通常、このような種々の変化が生じるわけであるが、硫黄島ではかつて、軽大臣をめぐる種々の語りが濃密に伝承されていたらしいことの一端がこの語りの変化からもうかがえ、興味深い。

〈事例2〉の語りの中に、徳躰神社が祀られている椿山は長濱天皇家が所有しており、徳躰神社は長濱豊彦さんが管理をしていたことが述べられている。興味深いことに、硫黄島の伝承では、壇ノ浦の戦から逃れた安徳天皇一行は硫黄島に流れ着いたとされ、長濱氏は安徳天皇の子孫とされている。[24]そのため、硫黄島では長濱家当主を「長浜天皇」とか「天皇」などと呼称していたそうである。島の神社の神事などはすべて長濱家当主が代々取り仕切ってきたそうで、第三十三代の長濱家当主であった長濱豊彦さん（故人）の時代までは、年間を通じて厳格な各種の神事が行われていたということである。残念なことに、現在の長濱家当主は島外におられるそうで、島の神事はほとんど消滅するか簡略化されているようである。

〈事例2〉の語りの中で注目されるのが、調査に来た人の何人かが徳躰神社がある山は古墳だと指摘したという点である。今のところ古墳かどうかは不詳であるが、遣唐使などのような貴人の遺体を葬った際、古墳のように造成して埋葬した可能性も否定できず、極めて興味深い。特に、徳躰神社に祀られているのは「遣唐使」軽大臣であると伝承されているわけであるから、説得力はある。関連史料があまりに不足しているため、推測の範囲を出ないのであるが、硫黄島に配流された平康頼が現在は「徳躰神社」と呼称されている塚の存在を認識していた可能性は否定できないように思われる。徳躰神社の位置は俊寛足摺の伝承を持つ港からも遠くないので、硫黄島にしばらく滞在していた場合、その前を通る可能性は高い。遣唐使の遺体を葬ったという伝承を持つ古墳のような塚の存在を平康頼が土地の人から聞いた場合、強い興味を示すように思われる。軽大臣の伝説が事実であるとした場合、軽大臣を祀る塚（徳躰神社）は、

一一七七年（安元三・治承元）に硫黄島へ配流された平康頼らの時代から数百年以前の塚ということになる。果たして、古代から中世を経て現在まで塚が存続してきたのかという疑問が生じるが、白雉四年（六五三）の第二回遣唐使遭難事件で亡くなった高田根麻呂を祀る大山神社が現在も竹島に存在していることから、第二回遣唐使高田根麻呂の時代に近い頃に亡くなったとされる人物（軽大臣）の塚が平康頼の時代を経て現在に至るまで硫黄島に残っていても不思議ではないように思われる。これらのことから、筆者は、平康頼が硫黄島に配流された際、遣唐使軽大臣を祀る塚とその伝承を知った可能性は皆無ではないと考えている。

〈事例3〉「徳躰神社と遣唐使」

遣唐使のあれは徳躰神社ありますよ。徳躰神社ってですねえ、あります。あのあそこ、冒険ランドに、行かれたですか。あの途中にあります。すぐ道脇に。徳躰神社っていってもう、小さいあれがあってですね、それが遣唐使で。遣唐使が、中国から帰る時に結局、時化（しけ）にあって、漂着して。そして流れ着いて、あそこまで来て、結局、亡くなられたんでしょたぶん。

それはこれにも載ってるはずです。徳躰神社。ここに漂着してですね、そしてこの軽大臣は亡くなられたということで、それを祀ってあるんです。それが徳躰神社ということであります。

もう管理は地区でやっとるだけで。もう今、硫黄島はだから神主さんもおらんもんだからもう全部地区で、こういう、史跡とか、そういうのはもう地区で、総体的にはもう地区が、管理はしてますよ。

やはりもう、管理ちゅうのは全部、お宮さん、その宮ちゅうのはもう全部やっぱり、天皇家がやってましたね。[25]

〈事例4〉「軽野大臣」

軽野大臣（かるのおとど）ったらなんか向こうからの遣唐使かなんかの、ねえ、あれでしょう。あれはねえ、ずうっと上の方にありますからねえ。冒険ランドに行く途中の十字路があって、そこの、ちょっと上がったとこにありますよ。それはねえやっぱし村の人たちがねえ、厄払いとか色んなことで岳の神ゆうところで祭りをするもんだから、それのお賽銭をあげて帰ったりねえ。その場所です。[26]

〈事例3〉〈事例4〉は徳躰神社はここに漂着した遣唐使を祀ってあるという語りである。遣唐使が中国から帰る時に時化（しけ）にあって漂着し、徳躰神社のところまで来て亡くなったという。徳躰神社の管理は、かつては全部お宮さん（天皇家）がやっていたが、現在は地区でやっているということであった。なお、〈事例3〉〈事例4〉で語られている冒険ランドとは、二〇〇四年にオープンした「冒険ランドいおうじま」のことで、鹿児島市を中心とした小・中学校の集団宿泊施設として活用されている。村立三島小・中学校から冒険ランドへ向かう道の途中に徳躰神社がある。

現在の硫黄島で徳躰神社について聞き取り調査をすると、〈事例3〉〈事例4〉のように遣唐使の軽（軽野）大臣を祀っているらしいという語りを聞くことができる程度で、〈事例2〉のような詳しい語りを聞くことは極めて困難な状況であった。〈事例2〉の語りは、徳躰神社を管理していた長濱家第三十三代当主長濱豊彦さんから聞いたという伝承経路を持つ貴重なものである。また、徳躰神社の呼称には個人差があった。筆者の調査では、硫黄島では徳躰神社のことを「トクタイジンジャ」とはあまり呼ばず、「カルノト」「カルノトド」「カルノオトート」「カルノオトド」などと呼ばれていた。徳躰神社に祀られている人物名「軽大臣（カルノオトド）」が神社の通称となっていることがうかがえる。

Ⅳ　灯台鬼説話と鬼界島地名起源説

先行研究により、灯台鬼説話は〈事例1〉で引用した『宝物集』巻第一の話が「初見」であることが指摘されているわけであるが、『宝物集』巻第一の灯台鬼説話を典拠としたらしいと推定されているのが、延慶本『平家物語』第一末に所収されている「迦留大臣之事」である。次に、延慶本『平家物語』第一末

に所収されている灯台鬼説話を引用してみる。

〈事例5〉延慶本『平家物語』第一末「迦留大臣之事」

昔迦留大臣ト申ス人ヲハシキ。遣唐使ニシテ、異国ニ渡テ御ワシケルヲ、何ナル事カ有ケン、物イハヌ薬ヲクハセテ、五躰ニ絵ヲ書テ、額ニ灯ガヒ（蓋）ヲ打テ、灯台鬼ト名テ、火ヲトモス由聞ケレバ、其御子ニ弼宰相ト申ス人、万里ノ波ヲ凌ギ、他州ノ雲ヲ尋テ見給ケレバ、灯鬼涙ヲ流シテ、手ノ指ヲ食切テ、カクゾ書給ケル。

我是日本花京客　汝即同姓一宅人
為父為子前世契　隔山隔海恋情辛
経年流涙蓬蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他州成灯鬼　争帰旧里棄斯身

ト書タリ。是ヲ見給ケム宰相ノ心中何計ナリケム。遂ニ御門ニ申請テ帰朝シテ、其悦ニ大和国迦留寺ヲ建立スト見タリ。彼ハ父ヲ助ツレバ孝養ノ第一也。是ハ其詮モナケレドモ、親子ノ中ノ哀サハ、只大納言ノ事ヲノミ悲テ、アケクレ泣アカシ給ケリ。[27]（傍線原田）

〈事例5〉延慶本『平家物語』に所収されている灯台鬼説話は、〈事例1〉『宝物集』所収話とほぼ同文であり、先行研究が指摘するように延慶本『平家物語』が『宝物集』所収話を引用したとみて問題はないと思われる。[28]『平家物語』諸本のうち、灯台鬼説話が所収されているのは延慶本『平家物語』と長門本『平家物語』と『源平盛衰記』である。これらのうち、延慶本は〈事例5〉の傍線部にあるように、親子の「孝養」の例話として引用していることがわかる。つまり、「父（迦留大臣）と子（弼宰相）」―「父（藤原成親）と子（藤原成経）」という関係である。これに対し、長門本と『源平盛衰記』は硫黄島に流された俊寛を有王が尋ねて行ったところに灯台鬼説話を配置している。これは、「父（迦留大臣）と子（弼宰相）」―「主（俊寛）と従（有王）」という関係になるわけであるが、長門本は「父子主従は、かはりたれ共、恩をほうする心は、一なり」と説明している。この、『平家物語』諸本の灯台鬼説話の「位置」の意味をどう読むかについては、多くの論が提出されているわけであるが、[29]筆者は、このような「位置」の問題が発生した背景に、典拠『宝物集』の成立事情をめぐる問題が関係しているのではないかと推定している。

本稿でみてきたように、延慶本『平家物語』が平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島周辺の地理情報を比較的正確に把握していたり、『源平盛衰記』が平康頼は双林寺の庵室にこもって『宝物集』をつくったと述べるなど、『平家物語』諸本の編著者たちは、平康頼・俊寛・藤原成経らの情報を詳しく把握していたようである。『宝物集』の灯台鬼説話についても、硫黄島に流された平康頼が著した『宝物集』に初めて収められた話であることを意識していた可能性もあるように思われる。そう考えると、延慶本および、長門本と『源平盛衰記』の灯台鬼説話は、〈硫黄島に流された〉成経・俊寛のエピソードに、〈硫黄島に流された〉康頼が著作で紹介した話を配置しようという意図があった可能性があるように思われる。これを分かりやすく示すと、次のようになる。

延慶本……
〈硫黄島に流された〉成経のエピソードに、
〈硫黄島に流された〉康頼が紹介した灯台鬼説話を配置。
長門本と『源平盛衰記』……
〈硫黄島に流された〉俊寛のエピソードに、
〈硫黄島に流された〉康頼が紹介した灯台鬼説話を配置。

種々の「ねじれ」が指摘されてきた『平家物語』諸本の灯台鬼説話の「位置」の問題の背景には、〈硫黄島に流された〉成経と康頼、もしくは、〈硫黄島に流された〉俊寛と康頼を灯台鬼説話を介在させて結ぼうとする隠された意図が存在していた可能性もあるように思われる。

本稿第一節で、延慶本『平家物語』第一末には、康頼・俊寛・成経らが流された島の名称として「鬼海嶋」「鬼界嶋」「流黄嶋」「油黄嶋」の四つの表記がみえることをみたように、康頼らが流された硫黄島には「鬼界島」という異称がある。延慶本『平家物語』は硫黄島（「流黄嶋」「油黄嶋」）と鬼界島（「鬼海嶋」

「鬼界嶋」）の二種の呼称を使用しているのに対して、康頼は『宝物集』で「鬼界が島」の呼称のみを使用している。硫黄島がなぜ「鬼界島」という異称で呼ばれるようになったかについては、複数の説がある。[30] 注目されるのは、複数ある鬼界島地名起源説の中に、灯台鬼との関係を述べるものが存在している点である。

寛文七年（一六六七）成立『神社啓蒙』巻之七「軽野神」の項では、灯台鬼説話が引用された後、「春衡之を見て以て我父なりと為す。遂に灯鬼を求めて日本に帰るの日、薩州硫黄の辺に没す。其の葬るところの地を名づけて鬼界と曰ふ」[31]と記されている。つまり、『神社啓蒙』では、軽野大臣は子の春衡とともに日本に帰ろうとしたが、硫黄島で亡くなり、葬った地を「鬼界」と名付けたとしているのである。正徳二年（一七一二）成立『和漢三才図会』「軽ノ大臣之故事」では「軽ノ大臣之故事―下学集及神社啓蒙ニ出ツ―」として灯台鬼説話を引用し、「春衡之ヲ見テオモヘラク我カ父也ト。遂ニ灯鬼ヲ求メテ日本ニ帰ル之日、颯州硫黄カ島ニ没ス。其ノ葬ル所之地ヲ名テ鬼界ト曰フ。」（原漢文）と記している。このことから、『和漢三才図会』は、『神社啓蒙』の説をそのまま引用し、軽ノ大臣は子の春衡とともに日本に帰ろうとしたが、薩摩国硫黄島で亡くなり、葬った地を「鬼界」と名付けたとしていることがわかる。[32] また、天保十四年（一八四三）に薩摩藩領の薩摩・大隅・日向三国の自然・寺社・物産等についてまとめられた『三国名勝図会』巻之二十八薩摩国河辺郡硫黄島「徳躰神社」の項では、灯台鬼説話を『神社啓蒙』から引用し、「一書云、本田氏神社考云、灯鬼此地にて薨ぜし故、此島に禿食（倉ヵ）を建、霊気を祭る、其霊気竹木不浄を犯者まで、霊出甚し、爰を以て此島を鬼界島とは名付し也、硫黄島とは、元来此所の名にして、鬼界島とは、霊気に依て是を号すと也、軽大臣の御事は、承和の比の事とかや云伝へたり、徳躰とは、灯台の誤と云り」[33]と記している。

「鬼界島」という異称をめぐるこれらの記述から、灯台鬼軽大臣が薩摩国硫黄島で亡くなり、その灯台鬼を葬った地は「鬼界」と名付けられたという地名起源説が、確実に存在していたことがわかる。つまり、この説に立つと、「鬼界島」という異称は、軽大臣の灯台鬼説話が元となっているということになるわけである。康頼もこの説を取っていたとした場合、『宝物集』で「鬼界が島」の呼称のみを使用したのは、灯台鬼軽大臣がこの島に葬られたことや鬼界島「灯台鬼」起源説を知っていたからと考えることもできるが、『宝物集』には鬼界島「灯台鬼」起源説を示唆する記述はみえないため、実際の所は未詳と言わざるをえない。鬼界島「灯台鬼」起源説に関しては、平康頼以前に成立していたとる立場と、平康頼が『宝物集』で軽大臣の灯台鬼説話を紹介したことが契機となって生じてきた後代の説ととる立場の二つを想定することができる。いずれにしても、灯台鬼をめぐる伝承は、鬼界島の地名起源説にまで影響を与えながら、大きく展開していったことがうかがえ、興味深いものがある。

徳躰神社の呼称に関して、先に引用した『三国名勝図会』に「徳躰とは、灯台の誤と云り」という記述があったわけであるが、妥当な指摘といえよう。徳躰（とくたい）は灯台（とうだい）のことで、徳躰神社の「徳躰」には「灯台鬼を祀る」という意味が込められているのであろう。もっとも、灯台に徳躰という漢字をあてた人物は、『三国名勝図会』が指摘するように誤ったわけではなく、感動的な軽大臣親子の逸話から「徳」という良い意味を含む漢字を意図的に選んだものと考えられる。ただし、硫黄島では、徳躰神社のことを「トクタイジンジャ」とはあまり呼ばず、「カルノト」「カルノトド」「カルノオトート」「カルノオトド」などと呼ばれていたことから、硫黄島では古くから「カルノオトド」を祀る祠として伝承されており、「トクタイジンジャ」の呼称は比較的新しいのではないかと推定される。

ここで問題になってくるのが、平康頼が遣唐使軽大臣の灯台鬼説話をどう捉えていたのかという点である。〈事例1〉『宝物集』灯台鬼説話の傍線部分に「此事日本紀以下諸家の日記にみえず。さ程の人、名をしるさず。無不審にあらず。遣唐使の唐にとゞまるは、清河の宰相・安倍の仲麻呂等也。但大和国に軽寺と云所あり。彼大臣帰朝の後建立といへり。能々定説〔を〕可尋也」とあるわけ

であるが、この部分から、種々の点を読み取ることができる。まず、「此事日本紀以下諸家の日記にみえず」という部分から、康頼自身が『日本書紀』や諸家の日記などの信頼できる文献類を調べてみたところ、遣唐使「軽の大臣」の記事が見出せなかったらしいことがわかる。ところが、一方で、「但大和国に軽寺と云所あり。彼大臣帰朝の後建立といへり。能々定説〔を〕可尋也」という部分から、遣唐使軽大臣が「帰朝の後」、大和国に「軽寺」を「建立」したという伝承が、康頼の時代にすでに存在しており、康頼がその伝承を不審に感じているらしいことがうかがえる。「軽寺」は『日本書紀』巻第二十九天武天皇朱鳥元年（六八六）八月条に「檜隈寺・軽寺・大窪寺に、各百戸を封す」とあるのが初出とされ、高向玄理（？～六五四）が建立したとされている。白雉五年（六五四年）に遣唐押使となって唐で亡くなった高向玄理には軽大臣説もあるが、詳細は不明である。[34] 特に注目されるのが「能々定説〔を〕可尋也」という部分で、ここから康頼自身が軽大臣軽寺建立説を疑っていることがわかる。

康頼自身が軽大臣軽寺建立説を疑った理由として、一つは、先に述べたように、康頼自身が調査したところ信頼できる文献類に遣唐使「軽の大臣」の記事が見出せなかったらしいことが考えられる。もう一つの理由として、筆者は、康頼が硫黄島に配流された際、遣唐使軽大臣を祀る塚とその伝承を知ったため、〈硫黄島に塚がある軽大臣が帰朝後軽寺を建立したという説は不審〉と疑問を持った可能性もあるのではないかと推定している。しかし、このことは、関連史料が少なく実証が困難であるため、可能性の指摘に留めておきたい。

結　語

以上で、鹿児島県硫黄島の遣唐使漂着伝説と灯台鬼説話についての筆者なりの考察を終えることとしたい。

一一七七年（安元三・治承元）の鹿ヶ谷の変により平康頼・俊寛・藤原成経らが配流された鬼界島がどの島であったかについては、鹿児島県三島村の硫黄島、鹿児島県大島郡の喜界島、長崎県長崎市の伊王島など複数の説がある。本稿では、延慶本『平家物語』第一末に、薩摩国にある「流黄嶋」（異名「鬼界嶋」）の周辺に「端五嶋」と「奥七嶋」の「十二」の島があるなど、周辺の地理情報が比較的正確に記述されている点、薩摩国にあるという点、火山がある島という点などから、鬼界島が鹿児島県三島村の硫黄島である可能性が極めて高く、断定してもよいことを確認した。

平康頼が硫黄島から都に戻って執筆した『宝物集』に所収されている灯台鬼説話は、先行研究によると、灯台鬼説話の出所は現時点では不明であること、『宝物集』が「初見」であること、「我国で作られた」こと、「康頼が独自に採集した」らしいことなどが明らかになってきている。

遣唐使の渡航ルート上にあるためか、鹿児島県大隅諸島の島々には遣唐使漂着伝説が複数伝承されている。大隅諸島の島々に伝承されている遣唐使漂着伝説のうち歴史上確実なものとしては、『日本書紀』巻二十五孝徳天皇白雉四年（六五三）の条にみえる第二回遣唐使遭難事件がある。この時に遭難したのは第二回遣唐使の第二船で、第二船の大使であった大山下高田首根麻呂ら百二十人のうち、五人だけが生き残って竹島に流れ着き、竹を採って筏を作り助かったという。ここの竹島は、鹿児島県三島村の竹島で、竹島には現在、大山下高田首根麻呂を祀る大山神社がある。この竹島から十キロ程度しか離れていない三島村硫黄島には遣唐使軽大臣を祀る徳躰神社があり、軽大臣にまつわる伝説が伝承されている。現在の徳躰神社について聞き取り調査をすると、徳躰神社のことを「トクタイジンジャ」とはあまり呼ばず、「カルノト」「カルノトド」「カルノオトート」「カルノオトド」などと呼ばれており、徳躰神社に祀られている人物名「軽大臣（カルノオトド）」が神社の通称となっていることがうかがえた。

硫黄島には「鬼界島」という異称がある。寛文七年（一六六七）成立『神社啓蒙』は、灯台鬼軽野大臣は子の春衡とともに日本に帰ろうとしたが、硫黄島で亡くなり、葬った地を「鬼界」と名付けたとする。また、天保十四年（一八

四三）成立『三国名勝図会』は、硫黄島「徳躰神社」の項で、灯台鬼軽野大臣が硫黄島で亡くなったために「鬼界島」と名付けられたこと、「徳躰」とは「灯台」の誤りであるなどと記している。「鬼界島」という異称をめぐるこれらの記述から、灯台鬼軽大臣が薩摩国硫黄島で亡くなり、その灯台鬼を葬った地は「鬼界」と名付けられたという地名起源説が、確実に存在していたことがわかる。灯台鬼をめぐる伝承は、鬼界島の地名起源説にまで影響を与えながら、大きく展開していったことがうかがえ、注目される。

関連史料が少なく実証が困難であるため、可能性の指摘に留めておかざるをえないが、筆者は、平康頼が硫黄島に配流された際、遣唐使軽大臣を祀る塚とその伝承を知った可能性は皆無ではないと考えている。少なくとも、その可能性を検討してみる必要があるように思われる。

灯台鬼軽野大臣をめぐる問題については、未解明のものが多い。本稿で論究し残した諸問題については、薩摩国における灯台鬼説話の伝承経路の問題、硫黄島の徳躰神社の管理の問題などとともに、別稿で検討することとしたい。

〈注〉

（1）大隅諸島の硫黄島（鹿児島県鹿児島郡三島村）での調査は、平成二十年（二〇〇八）八月に行った。

（2）柳田国男氏「有王と俊寛僧都」（ちくま文庫版『柳田国男全集9』筑摩書房・一九九〇、所収）。

（3）北原保雄・小川栄一氏編『延慶本平家物語　本文篇上』（勉誠社・一九九〇）、一七五～一七六頁。

（4）昇曙夢氏『大奄美史』（奄美社・一九四九）、同氏『復刻　大奄美史』（南方新社・二〇〇九）、七一頁。

（5）原口虎雄氏監修『三国名勝図会　第二巻』（青潮社・一九八二）、八七七頁。

（6）『三島村誌』（三島村・一九九〇）、六七九頁。

（7）『鹿児島県の地名』（平凡社・一九九八）、「十二島」の項（六五頁）。永山修一氏「キカイガシマ・イオウガシマ考」（『日本律令制論集下巻』吉川弘文館・一九九三、所収）、同氏「古代・中世における薩摩・南島間の交流―夜久貝の道と十二島―」（『境界の日本史』山川出版社・一九九七、所収）、ほか。

（8）冨倉徳次郎氏は『平家物語全注釈上巻』（角川書店・一九六六）「大納言死去」の〔補注〕「鬼界が島について」で「この硫黄島を鬼界が島と断じてよいと考える」（三三四頁）と述べている。福田晃氏「平家物語と高野山―初期念仏聖の活動をめぐって―」（同氏『軍記物語と民間伝承』岩崎美術社・一九七二、所収）、向井芳樹氏「俊寛の遺跡―二つの硫黄島―」（『帝塚山学院大学研究論集』一一、一九七六・12）、谷口広之氏「鬼界島流人譚の成立―俊寛有王説話をめぐって―」（『同志社国文一五』一九八〇・1）、『延慶本平家物語全注釈第一末』（汲古書院・二〇〇六）「廿八　成経康頼俊寛等油黄嶋へ被流事」の〔注解〕、ほか。

（9）山田昭全氏他校注『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』（岩波書店・一九九三）所収『宝物集』、三～四頁。

（10）注9の『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』所収『宝物集』の「治承元年」部分の脚注に「治承二年（一一七八）の誤りか。あるいは錯覚による混乱か。（中略）島を出たのは二年、帰洛は三年春（平家物語）とするのが穏当」（三頁）とある。

（11）注9の『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』所収『宝物集』、一一六頁。

（12）注9の『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』所収『宝物集』、三二一頁。

（13）注3の『延慶本平家物語　本文篇上』（勉誠社・一九九〇）、二六六頁。

（14）松尾葦江氏校注『源平盛衰記（二）』（三弥井書店・一九九三）、一三七頁。

（15）小川賢真氏「観念と浄土の文学―宝物集に於て―」（『仏教文学研究　第七集』法蔵館・一九六九、所収）、高橋俊夫氏「延慶本平家物語説話攷―宝物集との関係をめぐって（上）―」（『國學院雑誌』第七六巻第一一号、一九七

五・11)、山下哲郎氏「軽の大臣小攷―『宝物集』を中心とした灯台鬼説話の考察―」(「明治大学日本文学」第一五号、一九八七・8)、河原木有二氏「灯台鬼説話をめぐって」(「語学と文学」第二五号、一九九五・3)、山田昭全氏「宝物集と延慶本平家物語―引用に三態あり―」(「大正大学研究紀要」第八五輯、二〇〇〇・3)、小林幸夫氏「灯台鬼―連歌と韻書―」(同氏『しげる言の葉―遊びごころの近世説話―』三弥井書店・二〇〇一、所収)、浜畑圭吾氏「延慶本平家物語における「灯台鬼説話」」(「国文学論叢」第五一輯、二〇〇六・2)、ほか。

(16) 注9の『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』所収『宝物集』、二八～二九頁。

(17) 注15の高橋俊夫氏「延慶本平家物語説話攷―宝物集との関係をめぐって(上)―」の注13参照。

(18) 注15の山田昭全氏「宝物集と延慶本平家物語―引用に三態あり―」、参照。

(19) 注15の小川賢真氏「観念と浄土の文学―宝物集に於て―」、一六五頁。なお、引用部分中、「一」の次の読点「、」を補った。

(20) 注15の河原木有二氏「灯台鬼説話をめぐって」、参照。

(21) 日本古典文学大系『日本書紀　下』(岩波書店・一九六五)、三二〇頁。

(22) 角川日本地名大辞典『鹿児島県』(角川書店・一九八三)、「竹島〈三島村〉」・「鹿児島郡三島村」の項。なお、鹿児島県三島村の竹島で遭難した遣唐使高田根麻呂をめぐる伝承についての考察は別稿にゆずる。

(23) 話者は鹿児島県鹿児島郡三島村硫黄島の岩切一夫さん(S2)。平成二十年(二〇〇八)九月一日・原田調査、採集稿。

(24) 注6の『三島村誌』、九八頁。

(25) 話者は鹿児島県鹿児島郡三島村硫黄島の安永達誉さん(S3)。平成二十年(二〇〇八)八月三十一日・原田調査、採集稿。

(26) 話者は鹿児島県鹿児島郡三島村硫黄島の安永春吉さん(S2)。平成二十年(二〇〇八)九月二日・原田調査、採集稿。

(27) 注3の『延慶本平家物語　本文編上』(勉誠社・一九九〇)、一六六頁。

(28) 注15の山田昭全氏「宝物集と延慶本平家物語―引用に三態あり―」、ほか参照。

(29) 『平家物語』諸本の灯台鬼説話をめぐる問題については、注15の浜畑圭吾氏「延慶本平家物語における「灯台鬼説話」」が詳しい。

(30) 注7の永山修一氏「キカイガシマ・イオウガシマ考」、注8の『延慶本平家物語全注釈第一末』「廿八　成経康頼俊寛等油黄嶋へ被流事」の〔注解〕、ほか。

(31) 『大日本風教叢書　第八輯』(大日本風教叢書刊行会・一九二〇)、一八頁。

(32) 『和漢三才図会　下』(東京美術・一九七〇)、一一三一頁。ただし、『和漢三才図会』は硫黄島を鬼界と名付けたと記す一方で、鬼界島は硫黄島の巽の方角にあるとも記しており、混乱していることがうかがえる。

(33) 注5の『三国名勝図会　第二巻』、八九二～八九四頁。

(34) 注15の山下哲郎氏「軽の大臣小攷―『宝物集』を中心とした灯台鬼説話の考察―」参照。山下哲郎氏は、久遠寺本『宝物集』の「カルノ大臣」の左注に「高向玄理」とある点に注目し、『日本書紀』に白雉五年(六五四)押使高向玄理が遣唐使として派遣されたが唐で亡くなったと記されていること、延宝九年(一六八一)刊『大和名所記』の法輪寺(軽寺)の縁起に「灯台鬼」は「賀留大臣玄理」で子は「玄光卿」とあるが「この縁起の記事は信用できかねる」こと、軽寺縁起記事の真偽を問うよりも玄理が「灯台鬼説話に結びつけられていたこと」が大切な点であることなどを指摘している。

〔付記〕

鹿児島県の硫黄島(鹿児島郡三島村)での調査では、岩切一夫様、佐藤浩様、三島村教育委員会の方々に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

本稿は、日本学術振興会平成十九年度～二十二年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における文化叙事伝説の調査研究」の成果の一部であ

る。

連絡先：原田信之　地域福祉学科
新見公立短期大学　〒七一八―八五八五　新見市西方一二六三―二

（二〇〇九年十一月十八日受理）